氏名：　岡﨑　眸　（OKAZAKI Hitomi）
所属：　人間文化創成科学研究科文化科学系
学位：　Ph.D（1986 年 ミシガン大学）
職名：　教授
専門分野：　日本語教育学
E-mail：　okazaki.hitomi@ocha.ac.jp

◆研究キーワード　／　Keywords

共生日本語教育／年少者日本語教育／日本語教員養成
Education for asymbiotic Jpanese ／ Japanese Language education for chidlren ／ JSL Teacher development

◆主要業績　　総数（４）件

- 「第二部　共生日本語教育学の構築に向けて」『共生日本語教育学』岡崎眸監修　2007 年 10 月 pp.273-308　雄松堂
- 岡崎眸編著『母語を活用した教科学習の過程と結果の分析－日本語を母語としない児童生徒の場合－』萌芽科研研究報告書（平成 17 年度－平成 19 年度　課題番号 17652049）2008 年 3 月　pp.1-209
- 「学習者の主体性と教師の主導性－ 21 世紀の日本語教育の課題－」『北京日本学センター 2007 年国際シンポジウム「二十一世紀における北東アジアの日本研究」予稿集』2007 年 9 月　pp.98-103.
- 『共生日本語教育の教員養成に関する研究』お茶の水女子大学多言語多文化共生研究室　2008 年 3 月 pp.1-97

◆研究内容　／　Research Pursuits

主に二つの研究課題で研究を行った。

（1）多言語・多文化共生社会を切り開く日本語教育と教員養成のあり方を探ることを研究課題として、01 年から継続してきた基盤 B（2）(研究代表者) の最終年度に当たる 05 年度には、それまでの研究成果を総括する研究に展開し、成果報告書を作成した。具体的には、第一に、日本語母語話者と非母語話者が参加し、互いが共生するための言語的手段の獲得を目標とする共生日本語教育の特徴を提示したこと、第二に、共生日本語教育実習を受講した実習生の学びを質的･量的に明らかにしたこと、第三に、内省モデルに基づく実習プログラムの特徴を提示したことが挙げられる。

（2）言語少数派年少者の教科学習支援のあり方を探る萌芽研究 (研究代表者) の開始年度にあたり、横浜市鶴見中学の協力を得て、母語を活用し、母語の育成と統合した教科学習支援を二人の生徒を対象として行い、その特徴を観察した。結果、教育課程の中で母語を活用した授業の可能性が示唆され、次年度の取り組みに向けた基盤がつくられた。

The major research agendas were the following:

(1) establishing methodologies for Japanese language education and teacher-development which aimed at facilitating to develop multilingual/ multicultural society; (2) developing a system which was designed to support school subjects learning of linguistic minority children.

The agenda(1) was conducted as the final step of a five year research project B(2) funded by JSPS, and the final research report was published..

The agenda(2) was processed as the first step of a three year pioneer research project, also funded by JSPS. The project was done going the full scale cooperation of Tsurumi junior high school in Yokohama city.

◆教育内容　／　Educational Pursuits

（１）日本語教育コースで開講している「日本語教育実習」を科研費研究の一環とすることで、受講生だけでなく、後期課程国際日本学に所属する院生も含めて研究チームを作り、研究を進める態勢を作った。実習生間の話し合い、実習生の内省レポート、教壇実習における実習生の教授行動、参加者の談話などを収集し分析し、研究会で口頭発表を行い、論文にまとめる作業を行った。この態勢により、①自分たちの実践を対象とすることで、実践と研究の相互交流を体験できること、②グループによる研究とすることで、研究手法が先輩から後輩に伝授され、共有されること、③修士１年次にも小さい論文を１本仕上げられること、などの点で、日本語教育研究者を養成することを目標とする本コースにとって教育的意義があると考える。この研究への参加を通して、修士論文、博士論文へと研究課題を育てていく院生もいる。

（２）鶴見中学における教科学習支援に院生を参加させることで、学校現場を知り、現場に直接影響力を与えることのできる研究のあり方について考える場を与えた。

The educational persuie should be characterized as the following:

(1) education pro gram for Japanese language teacher practicum was put through by being carefully designed to be integrated to a research project funded by JSPS .;

(2) establishing a system in which graduate students participate in the school subjects learning support system for linguistic minority children in Tsurumi junior high school designed for the graduate students participants to shape the field where the had the opportunity to identify what would be the appropriate research manner that could be responsive to and therefore influential to educational practice.

Each of the attendants above had chances of the following experiences: 1. interactions between their teaching practice and research conducts; 2. research methodologies and fine techniques,.

◆研究計画

昨年度から始まった基盤研究Ｂ（一般）『多文化共生社会におけるビジネス共生日本語の構築と教員養成に関する研究』（H19-H22）で、昨年度収集したバンコクと上海における質問紙調査とインタビュー調査による資料の分析を進める。特に、グローバル企業としての日系企業が現地でどのような企業活動をしているのか、また、現地に派遣されている日本人駐在員及び現地労働者はどのように働き、それをどのように捉えているのかを、働く人々の目線にたって明らかにすることを目指す。この研究には修了生（留学生も含めて）が多くが関わっていることから、内外の修了生のネットワークを強化する点にも意味を持たせたい。

◆メッセージ

グローバル化に伴う社会の多言語化･多文化化の動きの中で、特にその社会で言語少数派に属する人々の言語権（母語を使う、母語を保持・育成する権利とその社会の共通言語を学び使う権利）は軽視され蹂躙されるという問題が深刻化しています。そこで、国内の言語少数派の人々（例えば就労目的で来日する日系人や日本人との結婚により来日するアジアからの花嫁など）を対象として、この社会の共通言語である日本語教育を支援する第二言語としての日本語教育のあり方が問われることになります。現状では、日本語の習得だけが強調されることによって、日本への同化要請の道具として機能するという傾向が見られます。彼らの母語・母文化の尊重の実現と統合される形の日本語教育のあり方が追求されなければならないと考えます。日本語教育コースで開講している「共生日本語教育実習」を中心にして、言語話者としての人々の全人格・生活全般を見渡す日本語教育のあり方学生のみなさんと一緒に追求していきたいと考えています。